

花と鳥の図書館

辻 憲男（文学部教授）

日本最初の公開図書館は芸亭（うんてい）である。八世紀の文人政治家・石上宅嗣（いそのかみのやかつぐ）が私邸の一隅を開放した。好学の人はしばし世俗を離れ、「知」を求めた。花竹の小山と魚鳥の池がある。読書と思索、講義も行われたとすれば私立学校のようなものだ。岡山県の閑谷学校や栃木県の足利学校を小さくした感じだろうか。詩文にすぐれた宅嗣は、一首だけの万葉歌人。父の乙麻呂は「銜悲藻」（がんびそう）という詩集を遺した。若い宅嗣は、専横の藤原仲麻呂を除こうとして失敗した。かの吉備真備（きびのまきび）に反対して、白壁王を擁立した〔光仁天皇〕。皇太子時代の桓武天皇に従ったこともある。その間の知恵の泉はいつも芸亭にあった。少年の日の賀陽豊年（かやのとよとし）はここで万卷の書を読み、後に学者として大成した。

興味のあることを勉強する時は我を忘れる。そうでない時でも、書庫に入ってあれこれ拾い読みをする。決まった読書だけではつまらない。静かな朝やのどかな午後、ひととき書物に親しめたら、一日がどんなに楽しいだろう。借り出さないで、また次の時に続きを書き写したりする。本が少なく貴重だった時代は、学生はすべからくそうしたものだ。図書館で過ごすのが学問だった。そのために、芸亭のような快適な環境が大切だった。

「芸」の字は艸の下に云。香り草のことで、葉に用いたことから書物を意味する。「藝」＝「芸」ゲイとは別字。「云」「雲」と同じくウンと読む。

（旧稿の一部を書き改めた）



奈良市的一条高校前にある芸亭跡の標柱。